第一節　長崎医学の黎明・南蛮医学

長崎は永禄十年（一五六七年）長崎純景の城下町であったが、医学に造詣の深かったルイス・ダルメイダ Ir. Luis Dalmeida（Luis de Almeida ポルトガルの貴族で、外科医）が来て布教を始め、永禄十一年（一五六八年）まで滞在し、布教所も建設された。その翌年、ダルメイダは豊後府内（大分）に移り、全財産を投じて日本最初の医学校を建立したが、又、五島純定を治療したりして、なお長崎地方の診療と布教を続けたのである。この年、ダルメイダの後任として長崎に来た神父ガスパル・ヴィレラ P. Gaspar Vilela はトードス・オス・サントス Todos os Santos 会堂を建立し、漸くキリスト教と共に当時の西洋医学いわゆる南蛮医学が伝えられることになった。

元亀元年三月十五日（一五七〇年四月二十日）以後、四月にかけて、ポルトガルの神父メルショウル・デ・フィゲイレド P. Melchior de Figueiredo（Be'chior de Figueiredo）は福田浦に在留中、長崎の水深を測量し、長崎を良港と認めたので、キリシタンたちはその家族と共に船舶の保護のもとに住居を構えることとなったが、元亀二年三月十五日（一五七一年四月九日）領主大村純忠の命で朝長対馬が長崎六町建を始めた。その後、天正八年（一五八〇年）から同十五年（一五八七年）まで、イエズス会が知行した長崎の医学はしばらくの間、南蛮医学が栄えた。

天正十二年冬（一五八四年十二月）フィゲイレドは病に罹り、当代随一の名医と称せられた李朱医学家曲直瀬道三に診療をうけるため、京に上ったが、フィゲイレドは曲直瀬道三とその門人八百人ばかりに洗礼を授けた。

長崎に布教しはじめたダルメイダ及び長崎開港に関与したフィゲイレドと西洋医学伝来とは浅からぬものがあ

り、曲直瀬道三の李朱医学もその後南蛮医学の影響を受けたと思われるが、文献に乏しく、未だ明らかでない。

再び、長崎に目を移すと、長崎における南蛮医学は、教会によって維持された。即ち、キリシタン救療施設たる教会の外郭団体、慈悲屋の組合 Confraria de Misericordia ができ、当番制で、会計、病院事務、収容看護が行われた。長崎にはミゼリコルディア a Igreja e Casa da Misericordia が本博多町に建設された。院長は日本人ジュスト Justo であった。慈悲屋とも呼ばれたミゼリコルディアは組合員の寄附で七院を経営した。男女の養老院、療病院と貧民救済院等であった。慶長十九年（一六一四年）に至り、キリシタンの諸会堂は豊後府内（大分）のサンチャゴ Santiago 病院などと共に破却されたが、長崎の慈悲屋は難を免がれた。然し、元和六年（一六二〇年）、遂にミゼリコルディアは破却され、南蛮医学系の長崎の救療施設は全く姿を消してしまった。慶長年間最も隆盛の域に達していた南蛮医学もここに衰微の徴を示すのである。そしていわゆる二十六聖人の中にも、パウロ茨木、レオ茨木、フランシスコ吉、パウロ鈴木及びトマ弾記など、京都における医療関係者が含まれていた。

ポルトガル宣教師として慶長十六、七年（一六一一年から一六一二年）頃渡来し、布教に従事していたクリストファン・フェレイラ Christovão Ferreira は、天正八年（一五八〇年）、ポルトガルのトレス・ヴェドラス Torres Vedras に生れたが、慶長十九年（一六一四年）の禁教後も布教に努めていた。然し、遂に寛永十年（一六三三年）、逮捕されて、穴吊りの刑に処せられ、棄教して了った。その後は沢野忠庵と改名し、宗門目明となり、日本の女を娶って忠次郎という子と娘一人を儲けたが、娘は、後に門人杉本忠恵の妻となった。

忠庵は天文学に通じ、慶安三年（一六五〇年）、南蛮天文学書を著わした。当時、長崎にいた向井元升はそれを基として乾坤弁説を著わしたのである。忠庵は又医学にも造詣深く、外科を教えた。南蛮流外科書やその秘伝書は多く忠庵に仮託したものであるが、西洋の中世に行わ

れたサンキ・コンテ・ヘレマ・マレンコンヤ等の四体液説に基いているものである。療法としては、早期に炎症を散らすとか、早く化膿させて切開排膿する方法がとられ、薬品としては、バルサムや、椰子油、ポルトガル油（オレフ油）等、エキゾチックなものが用いられたので、当時の医師たちは好奇心をそそられたようである。

忠庵は慶安三年十月十一日（一六五〇年十一月四日）に没したが、その門人としては、杉本忠恵、半田順庵、西玄甫等が知られている。

杉本忠恵（一六一八―一六八九）は忠庵の女婿であるが、寛文六年十二月一日、将軍家綱に拝謁し、寛文十年十二月二十五日、幕府の医官となった。元禄二年十月六日、没したが、その子元真（一六五二―一七二四）以下、良英（一六九八―一七四二）、良貞（一七三三―一七五〇）、良猷（一七三五―一七八一）等、代々父祖の業を継いで名を為した。

半田順庵は忠庵に学び、後、マカオに渡って実地修学したと伝えられるが、その門人中、吉田流の祖となった吉田自休は最も傑出していた。吉田自休（一六〇七―一六八六）の門人には吉田自庵、村山自伯、松丘宗順等がある。

西玄甫は通称新吉、後に吉兵衛と云い、オランダ通詞であった。沢野忠庵のみならず、出島蘭館医にも教をうけ、カピタン、コンスタンチン・ランスト Constantin Ranst とダニエル・ファン・フリート Daniel van Vliet 及び医師アルノルド・ディルクセン Arnold Dirckz 連署の証明書を得て（一六六八年二月二十日、即ち寛文八年一月十九日附）オランダ東インド会社のチャップを貰った。そして延宝元年（一六七三年）、江戸に召出され、幕府の医官となった。玄甫は貞享元年九月十五日に没したが、杉田玄白の蘭学事始にもその名が見え、西流の祖である。

西玄甫の門人には高原道懿、茂升沢、広中養栄、伊東升林、加悦升泉、小川元宅等があった。